

### 第三章 光る源氏の物語 須磨の秋の物語

#### [第一段 須磨の秋]

須磨には、いとど心尽くしの(ますます物思いが深まる)秋風に、海はすこし遠けれど、行平中納言の、「\*関吹き越ゆる」と言ひけむ\*浦波、夜々は(よるよるは、毎夜毎夜)げにいと近く聞こえて、またなくあはれなるものは(非常に寂しい)、かかる所の秋なりけり(閑所の秋でした)。  
\*「関吹き越ゆる」の引歌は、「旅人は袂涼しくなりにけり関吹き越ゆる須磨の浦風(続古今集、羈旅、中納言行平)」、との事。 \*「浦波夜々」については『集成』は「浦波」が「寄る寄る」に「夜々」を言い掛ける歌語的表現」と注し、さらに「住吉の岸の白波よるよるはあまのよそめに見るぞ悲しき(後撰集恋一、五六一、読人しらず)を引歌として指摘する。>と注にある。引歌を見ると、「すみの江の(京を守る住之江神へ通じる須磨の海の)岸の白波寄る夜は(松原岸に白波が寄せる夜が)海人の余所目に見るぞ悲しき(他人事ながら海辺に暮らす者でさえ都への郷愁のようで悲しく思える)」という事かと思うが、「よそめにみるぞ」が唐突で如何にも分かり難い。そこで少し Web 検索すると、どうやら引歌の本歌らしい歌が見つかった。「すみのえの 岸に寄る浪 夜さへや 夢の通ひ路 人目避くらむ(ひとめよくらむ)」(古今 559、藤原敏行)が其れで、有名な歌らしく<須磨の海岸に昼も夜も波は寄せ来ると言うのに夜になっても都に居る貴方は人目を憚って夢の中ですら逢いに来ない>という事で、<夢にすら現れないのは其の相手の想いが無いから>という考え方に基いているらしい。男が女の家に通うという当時のしきたりからして、男の敏行が詠んだ歌だが、女の恋心の歌、との事。「よそめにみるぞ」は其の<女の恋心>をとということなのだろう。ともあれ、本歌の「よる波よるさえ」を「白波よるよるは」にした方が面白そうだ、というのが本歌取りする思い付きだった、のだろうと作者も興に乗って真似てみた、ように見える。

御前にいと人少なにて(近くには控えの者もごく僅かで)、うち休みわたれるに(皆寝静まっている時に)、一人目を覚まして、枕をそばだてて(枕元で聞き耳を立てて)四方の嵐を(よものあらしを、家の周りを吹きすさぶ風の音を)聞きたまふに(御聞きになると)、波ただ(浪が直ぐ)ここもとに立ちくる心地して(此処まで押し寄せてくる気がして)、涙落つともおぼえぬに(気弱に泣いた心算は無いのに)、枕浮くばかりになり(枕が涙に浮くほどになっていました)。琴(きん、七弦琴)をすこしかき鳴らしたまへるが(を少し弾いて御覧に為るが)、我ながらいとすごう聞こゆれば(自分でも憐れっぽい音だったので)、弾きさしたまひて(途中で御止めになって)、

「恋ひわびて泣く音にまがふ浦波は、思ふ方より風や吹くらむ」(和歌 12-30)

「涙交じりの波音は、恋しい都の呼び声か」(意識 12-30)

と歌ひたまへるに(と歌い為さると)、人びとおどろきて(宿直の者は起き出して)、めでたうおぼゆるに(上手なものだと思いながらも)、忍ばれで(悲しみを誘われて)、あいなう起きみつ(思わず座り直して)、鼻を忍びやかにかみわたす(皆で鼻を静かにかんでいました)。

「げに、いかに思ふらむ(そうか、皆辛いんだな)。我が身ひとつにより(私ひとりのせいで)、親、兄弟(はらから)、片時立ち離れがたく、ほどにつけつつ思ふらむ(其れ相応の妻がいる)家を別れて、かく惑ひあへる(このようなあてない暮らしをしているのだから)」と思すに、いみじく

て(と御思いに為ると身に染みて)、「いとかく思ひ沈むさまを(自分がこの様に気落ちしては)、心細しと思ふらむ(頼りなく思うだろうな)」と思せば(と御思いに為って)、昼は何くれとうちのたまひ紛らはし(昼は他愛無い冗談で気を紛らわし)、つれづれなるままに(気の向くままに)、色々の紙を継ぎつつ(いろんな紙を繋ぎ合わせては)、手習ひをしたまひ(習字の出来栄えを比べたり)、めづらしきさまなる唐の綾などに(変わった感じのする中国製の模様紙などに)、さまさまの絵どもを(色々な絵の数々を)描きすさびたまへる屏風の面どもなど(書き進みなさった屏風の表の数々は)、いとめでたく見所あり(とても見事で傑作でした)。

人びとの語り聞こえし(伝え聞いた須磨の)海山のありさまを、遥かに思しやりしを(京に居た時は遠く思い描いていらしたが)、御目に近くては(実際に御覧になって)、げに及ばぬ磯のたたずまひ(話以上の磯の風景を)、二なく描き集めたまへり(今まで無かった画風で何枚も描きなさいました)。

「このころの上手にすめる(当代きって名画を物にすると評判の)\*千枝(ちえだ)、常則(つねのり)などを召して(などを呼び寄せて)、\*作り絵(つくりゑ、この絵に彩色を)仕うまつらせばや(施させたいくらいですね)」と、心もとながりあへり(供人たちは残念がっていました)。 \*「千枝、常則」は、村上天皇時代の高名な絵師、との事。 \*「作り絵」は<大和絵の技法の一。墨線で下描きし、その上から彩色を施し、最後に人物の顔貌や衣の輪郭などを墨線で精緻(せいち)に描(か)き起こすもの。平安時代の源氏物語絵巻が典型的な例。(大辞泉)>との事。

なつかしうめでたき御さまに(打ち解けた源氏の優れた姿に接して)、世のもの思ひ忘れて(供人たちは現下の憂いも忘れて)、近う馴れ仕うまつるをうれしきことにて(親しく近付いて御仕えする事を喜んで)、四、五人ばかりぞ、つとさぶらひける(ずっと付き従っていました)。

前栽(せんざい、前庭)の花、色々咲き乱れ、おもしろき夕暮れに、海見やらるる廊に出でたまひて、たたずみたまふさまの、ゆゆしうきよらなること(源氏の幽玄美は)、所からは、まして(寂れた場所柄に引き立って)この世のものと見えたまはず(この世の物とも思われません)。

白き綾のなよよかなる(白い綾織の柔かい内着に)、\*紫苑色などたてまつりて(薄紫を重ね着して)、\*こまやかなる御直衣(濃い水色の上着を)、帯しどけなくうち乱れたまへる御さまにて(帯をゆるく締めた寛ぎ姿で)、 \*「紫苑(しをん、しをに)」は<キク科の多年草。山間の草地に自生し、高さ1.5~2メートル。根際に大きな葉が群生。秋、多数の淡紫色の花を開く。漢方で根を乾かしてせき止めの薬にする。>との事。 \*「こまやか」は織りで言えば密で、色で言えば濃色。此处では藍染のこと、らしい。

「\*釈迦牟尼仏の弟子」と名のりて(と名乗ってから)、ゆるるかに読みたまへる(ゆっくりと読経なさる源氏の声は)、また世に知らず聞こゆ(また世に無く優雅でした)。 \*「しゃかむにぶつのでし」については<源氏の詞。勤行を始める前の名乗り。「迦牟尼仏の弟子、源の某(源氏の名)」云々と名乗る。>と注にある。

沖より舟どもの(沖から何艘かの船が)歌ひののしりて漕ぎ行くなども聞こゆ(大きな声で歌いながら漕いで行くのが聞こえる)。ほのかに、ただ小さき鳥の浮かべると見やらるるも(それらが遠くに小鳥が浮かんでいるように見えるのも)、心細げなるに、\*雁の連ねて鳴く声、楫(かぢ)

の音にまがへるを(舵の音に似ているのを)、うち眺めたまひて(呆然と御覧になって)、涙こぼるるをかき払ひたまへる御手つき(涙を払いなざる源氏の手振りが)、黒き御数珠に映えたまへる、故郷の女恋しき人びと(残してきた女に都の雅を懐かしんでいた供人たちは)、心みな慰みにけり(皆心が慰められました)。 \*注にく『完訳』は「晴虹橋影出秋雁櫓声来」(白氏文集卷五十四、河亭晴望詩)を指摘する。>とある。秋の風情の常套句、らしい。

「初雁は恋しき人の列なれや、旅の空飛ぶ声の悲しき」(和歌 12-31)

「月に雁がね沖の船、何れ遥かな秋の夕暮れ」(意識 12-31)

\*注にく源氏の歌。南下してきた「初雁」に自分の身の上を喩え、旅の寂寥を詠む。>とある。「初雁(はつかり)」は<陰暦九月ころ、初めて北方から渡ってきたガン。また其の鳴き声(初雁が音、雁金)>(古語辞典)との事。「列なれ(つらなれ)」は雁が群れ飛び列を作る光景に<連れ=使=便り、なのだろうか>と連想したのだろう。1951年の東京生まれの私でも新国劇の『国定忠治』は「ああ、雁が鳴いて南の空に飛んで行かあ」と言う台詞に秋の夕暮れの寂寥感を覚える。マガンの生態については、検索中に見た越智伸二という人のWebサイトにある「伊豆沼」のページが秀逸でした。

とのたまへば(と源氏が御詠みになると)、良清(よしきよ)、

「かきつらね昔のことぞ思ほゆる、雁はその世の友ならねども」(和歌 12-32)

「賑わう京の思い出を、雁の知らせに聞こうとは」(意識 12-32)

民部大輔(みんぶのたいふ、惟光)、

「心から常世を捨てて鳴く雁を、雲のよそにも思ひけるかな」(和歌 12-33)

「雁の思いを知ったのは、雲を離れた旅の空」(意識 12-33)

前右近将督(さきのうこんのじょう)、

「常世出でて旅の空なる雁がねも、列に遅れぬほどぞ慰む」(和歌 12-34)

「都を遠く離れても、道連れが居る頼もしさ」(意識 12-34)

友まどはしては、いかにはべらまし(友情なくして何の人生でしょう)」と言ふ。\*親の常陸になりて、下りしにも誘はれで、参れるなりけり(この者は親が常陸介になって下向したのに其方に同行しないで、源氏に付き従って来ていたのです)。下には思ひくたくべかめれど(内心では思う所が在るのだろうが)、ほこりかにもてなして(晴れがましく振舞って)、つれなきさまにしありく(気にしていない様子で過ごしていました)。 \*注にこの「親」は<常陸介、すなわち空蟬の夫。>であり、この前右近将督は<紀伊守の弟。「関屋」巻参照。>とある。

[第二段 配所の月を眺める]

月のいとほなやかにさし出でたるに、「今宵は\*十五夜なりけり」と思し出でて、殿上の御遊び(てんじゃうのおんあそび、中秋の名月に恒例だった宮廷の音楽会が)恋しく(懐かしく思い出されは)、「所々(一緒に興じた女たちも其々の所で)眺めたまふらむかし(この月を眺めて御出でだろうか)」と思ひやりたまふにつけても(と思ひ遣りなさって源氏は)、月の顔のみまもられたまふ(月の顔ばかり見守りなさいます)。 \*「十五夜」といえば陰暦八月十五日の中秋。

「\*二千里外故人心(じせんりのほかこじんのこころ、遠く離れた友を思う)」と誦じたまへる(と源氏が漢詩を口ずさみなさると)、例の涙もとどめられず(供人はまたも涙を抑え切れません)。\*注に<「三五夜中新月色(さんごやのなかしんげつのいろ、十五夜の名月を見て) 二千里外故人心」(白氏文集卷十四、律詩)の詩句。>とある。是は有名な漢詩で供人も当然知っていて、白居易の『八月十五日夜、禁中獨直(独り宮中で宿直し)、對月憶元九(月を見て元榎を思う)』と言う題らしい。友人の元榎(げんしん)が霧深い江陵に左遷されていて、白居易が都で月を見ながら、この名月も江陵では曇天で見られないだろう、と友の不遇を思い遣った詩のようだ。源氏の不遇とも重なるが、源氏は自主退去で閑居暮らしをしている。

入道の宮の、「\*霧や隔つる(霧が月を邪魔する)」とのたまはせしほど(と仰って居らした事が)、言はむ方なく恋しく(敵勢力の悪意が帝を遠ざけるといふ漢詩と同じ意味で源氏の心に迫って言い様も無い切なさを御覚えになり)、折々のこと思ひ出でたまふに(故院の崩御から中宮の出家や六姫との逢瀬に春宮や若君の事などが思い出されて)、よよと、泣かれたまふ(声を上げて御泣きに為りました)。 \*「霧や隔つる」は<藤壺の詠んだ歌「九重に霧やへだつる雲の上の月を遥かに思ひやるかな」(「賢木」)の文句。一昨年(902)の九月二十日のことである。>と注釈にある。

「夜更けはべりぬ(だいぶ夜も更けましたが)」と聞こゆれど(と従者が申し上げて)、なほ入りたまはず(源氏は寝室に入ろうと為さしません)。

「見るほどぞしばし慰むめぐりあはむ、月の都は遥かなれども」(和歌 12-35)

「いつか必ず戻ろうと、月の都を遠く見る」(意識 12-35)

その夜(入道宮が其の歌を御詠みに為った一昨年(902)の九月の夜に)、主上の(うへ、兄帝の)いとなつかしう昔物語などしたまひし御さまの(とても懐かしげに昔話など為され下さったお姿が)、院に似たてまつりたまへりしも(故院に似て御出でに居らしたのも)、恋しく思で出できこえたまひて(恋しく思い出し申し為さって)、

「\*恩賜の御衣は今此に在り(おんしのぎょいはいまここにあり)」と誦じつつ入りたまひぬ(と言う漢詩を口ずさみなさりながら寝室へお入りに為りました)。御衣は(おんぞは、実際に帝から賜った上着は)まことに身を放たず(詩の通り本当に持って来ていて)、かたはらに置きたまへり(側に置いて在ったのです)。 \*この漢詩は<「去年今夜侍清涼 秋思詩篇独断腸 恩賜御衣今在此 捧持毎日拜余香」(菅家後集、九月十日)の詩句。>と注釈にある。「菅家後集(かんげこうしゅう)」は<平安中期の漢詩集。1巻。菅原道真著。延喜3年(903)までに成立。正式の書名は「西府新詩」。大宰府へ流されてから作った詩46編を収録。道真が死の直前に紀長谷雄(きのはせお)に贈ったもの。菅家後草。>(大辞泉)との事。話は込み入って

いて少々面倒臭い。901年正月に、七月の延喜改元に先立って、道真は藤原時平との権力争いに敗れて大宰権帥(だざいごんのそち)に左遷された。この詩は其の年の九月十日に、遠く都を離れた大宰府で詠まれたものとされる。詩の意味はく去年の重陽の節会では右大臣として清涼殿の玉座近くに控えて「愁思」の御題で詩篇したが今では其れも断腸の思いだ、其の時の詩作での褒美に陛下から拝領した服は筑紫まで持参し毎日捧持して名残りを惜しんでいます>という郷愁のようだ。道真の娘婿の齊世(ときよ)親王は帝の弟宮だったが、道真は帝の信任も厚かった。帝の信任を得ながら、帝の弟宮を後見する立場で、敵対勢力に一敗地塗れているという道真の事情は、確かに源氏の今の境遇と重なる所があって、実際に源氏にも拝領の御衣が在ったという設定なのだから、この漢詩を口ずさんだ源氏の気持ちは納得せざるを得ない。というか作者は丸々、道真の逸話を出す為に源氏に其の真似をさせた、ようなものだ。因みに、道真は延喜三年(903)に59歳で大宰府に於いて失意のまま没したが、源氏が準ったのは断腸の思いだけらしい。尚、「重陽(ちょうよう)」は九月九日のことで、陰陽思想で奇数は「陽」とされていて、その「陽数」の内最大「9」が重なる「重陽」を不吉と考え、邪気を祓う為の祭日となった、らしい。

「憂しとのみひとへにものは思ほえで、左右にも濡るる袖かな」(和歌 12-36)

「憎さばかりじゃないだけに、単衣の袖では泣ききれない」(意識 12-36)

### [第三段 筑紫五節と和歌贈答]

そのころ、\*大貳は上りける(その頃に大宰府次官が上京する事がありました)。\*「大貳(だいに)」は大宰府次官だが、当時は長官の帥(そち)は帝の弟宮が成っていて帥宮(そちのみや)として物語にも登場しているが、帥宮は筑前に赴任せず宮内省の地位としての職名だったので、西海道統括指令の実権は大貳にあった、と言う重職である。尚、「大宰府(だざいふ)」は地方の統括指令で、ヤマトに於いて各道・地域ごとに設置されていた第2政府だったらしいが、大宝律令(701年)で中央集権が画策される中で、畿内からの遠さと大陸との近さから唯一、西海道だけに残された、との事。

いかめしく類広く(一大勢力の同族の大所帯で)、娘がちにて(娘の多い一行で携える多くの道具類の)所狭かりければ(ところせかりければ、道中の持ち運びに難儀したので)、北の方は舟にて上る(御内儀女中は船で上京なさいます)。\*大貳本隊は陸路で女中は水路。

浦づたひに逍遥(せうえう、遊覧)しつつ来るに、他よりもおもしろきわたりなれば(須磨の浦が特に風光明媚でしたので)、心とまるに、「大将(だいしょう、源氏の大將が)かくておはす(隠棲していらっしゃいます)」と聞けば、あいなう(思わず)、好いたる(色気づいた)若き娘たちは、舟の内さへ(舟の中だというのに)恥づかしう、心懸想せらる(恥づかしがって身づくろいを改めました)。まして、五節の君(ごせちのきみ、源氏と恋仲であった大貳の娘の五節の姫君)は、綱手(つなで、接岸の縄を)引き過ぐるも(引き寄せる事も無く須磨に上陸できないまま通り過ぎてしまう事が)口惜しきに(残念で)、琴の声(きんのこゑ)、風につきて(風に乗って)遥かに聞こゆるに、所のさま(閑所の様子や)、人の御ほど(お暮らしぶりを)、物の音の心細さ、取り集め(その音の心細さに思い合わせて)、心ある限りみな泣きにけり(感じ入った者は皆泣きました)。

\*帥(そち、大貳は)、御消息聞こえたり(源氏に手紙を遣してきました)。\*注にく長官が任地に赴任せず、次官が当地で実質上の長官の任務を遂行する場合は、その長官名をもって呼称されることがある。>とある。

「いと遙かなるほどよりまかり上りては、まづいつしか(先ず何時とも無く真っ先に)さぶらひて(ご挨拶に伺って)、都の御物語もとこそ(都の御話しでも伺えればと)、思ひたまへはべりつれ(存じておりましたが)、思ひの外に、かくておはしましける御宿を(こうして隠棲為されているお住まいを)まかり過ぎはべる(通り過ぎてまいります)、かたじけなう悲しうもはべるかな(勿体無く悲しく存じます)。あひ知りてはべる人びと(知り合いの者や)、さるべきこれかれ(縁者の誰彼が)、参で来向ひて(この近くまで迎えに出てきていて)あまはべれば(大勢居りますので)、所狭さを思ひたまへ(思うに任せず)憚りはべることもはべりて(ご迷惑かと存じまして)、えさぶらはぬこと(ご遠慮いたします)。ことさらに参りはべらむ(また改めてご挨拶に参ります)」

など聞こえたり(などと申して来ました)。子の筑前守ぞ参れる(大弐の子で五節の兄である筑前守が遣いに参上していました)。この殿の(この殿は)、蔵人になし(源氏が蔵人に取り立てて)顧みたまひし人なれば(面倒を見てきた人だったので)、いとも悲し(源氏の不遇を其れはとても悲しんでいました)。いみじと思へども(何たることかとは思っても)、また見る人びとのあれば(世間体からして)、聞こえを思ひて(おかしな言い掛かりも受けかねないので)、しばしもえ立ち止まらず(とてもゆっくり止まっては居られませんでした)。

「都離れて後、昔親しかりし人びと、あひ見ること難うのみなりにたるに(相見える事は難しくなっていたが)、かくわざと立ち寄りものしたること(この様にわざわざ立ち寄りくれたとは、嬉しく思います)」とのたまふ。御返りもさやうになむ。

守、泣く泣く帰りて、おはする御ありさま語る。帥よりはじめ、迎への人びと、まがまがしう泣き満ちたり。五節は、とかくして聞こえたり(せめてもと手紙を差し上げました)。

「琴の音に弾きとめらるる綱手縄、たゆたふ心君知るらめや (和歌 12-37)

「引き綱のような琴の音に、揺れる思いの頼りなさ (意識 12-37)

好き好きしさも(はしたなさを)、\*人な咎めそ(貴方は責めないでね=どうかお許し下さい)」と聞こえたり(と在りました)。 \*注釈に<「人などがめそ」は、「いでわれを人などがめそ大船のゆたのたゆたに物思ふころぞ」(古今集恋一、五〇八、読人しらず)の第二句。>とある。歌の面は「そんなに私を貴方は責め為さいますな大船がゆったり漂うように思い悩んでいる所なのだから」とあって、「大船の(おほぶねの)」は「ゆた」および「たゆた」の枕詞との事。それでも「物思ふ」「大船」というからは大きな問題、結婚などの人生の一大事での決心、に悩んでいるものかと思う。ただ此処では、恋心を舟つながりの洒落言葉で言ってみた、のだろう。

ほほ笑みて見たまふ(源氏はその歌を微笑んで御覧に成っていました)、いと恥づかしげなり(とても恥ずかしそうな所を可愛く御思いでした)。

「心ありて引き手の綱のたゆたはば、うち過ぎましや須磨の浦波 (和歌 12-38)

「綱に漂う舟ならば、波の彼方に過ぎま須磨い (意識 12-38)

\*いさりせむ(漁民になる)とは思はざりしはや(とは思っていませんでした)」とあり(と返書しました)。 \*注に<「いさりせむと」は、「思ひきや鄙の別れに衰へて海人の縄たきいさりせむとは」(古今集雑下、九六一、小野篁)の第五句。>とある。五節の添え句と同じ古今集からの洒落言葉を添え句にして返歌する、という凝った趣向。この歌は小野篁(おののたかむら)が「隠岐の国に流されて侍りける時によめる」と詞書にあるのだそうで、「かつて思った事が在ただろうかまさか自分が島流しに落胆して魚獲りの網を手繰って漁民暮らしをするなどとは」という郷愁の歌で、島流しではないが海辺で流浪の身の源氏が引き合いに出すのに説得力がある、のだろう。ただ「おとろへて」「いさりせむ」という権力志向には、私は共感したくない。それだけに源氏の野心を感じる。

\*駅の長(むまやのをさ、街道の宿場管理官)に句詩取らす人もありけるを(に漢詩を与えた道真公の例も在るが)、まして(源氏と歌を詠み交わしまでした五節は)、落ちとまりぬべくなむおぼえける(独り一行から離れて此处へ止まりたい思いでした)。 \*注釈に<菅原道真が左遷されて西に向かう途上、明石の駅で、その駅長に詩句を与えた故事をさす。その詩句は「駅長莫驚時変改一栄一落是春秋」(大鏡、時平伝)。「くし」について、『集成』は「句詩」説、『完訳』は「口詩」説をとる。>とある。詩句は左遷に同情した駅長の慰めに道真が応えたもので「駅長莫驚時変改(駅長驚く事なかれ時の変わり改まるを)一栄一落是春秋(一つに栄え一つに落ちるは是ただ春秋の時の移ろい)」ということらしい。日本式の音読みでは特に深い韻を感じないし、有り勝ちな文言に思えるが、管公の祀り上げには恐れ入る。

#### [第四段 都の人々の生活]

都には(宮処に於いては)、月日過ぐるままに(月日が過ぎると)、帝を初めたてまつりて(帝を初めに拝し申し上げて)、恋ひきこゆる折ふし多かり(光源氏を恋しがることが多く在りました)。春宮は、まして、常に思し出でつつ(いつも源氏を思い出しなさっては)忍びて泣きたまふ(隠れて御泣きに成ります)。見たてまつる御乳母(お世話をしている乳母や)、まして命婦の君は、いみじうあはれに見たてまつる(何とも御可哀想に思い申し上げます)。

入道の宮は、春宮の御ことをゆゆしうのみ思ししに(春宮の将来を心配ばかり為さって居らしたが)、大将もかくさすらへたまひぬるを(源氏もこのように流浪なさって御出でなのを)、いみじう思し嘆かる(何とも不安に思い嘆きなさっていました)。

御兄弟の親王たち(おんはらからのみこたち、源氏の弟の親王たちや)、むつまじう聞こえたまひし上達部など(親しくなさっていた公卿たちなどは)、初めつ方は(源氏が都を離れた直後は)とぶらひきこえたまふなどありき(手紙でお見舞いを申し上げなさったりしたのです)。あはれなる文を作り交はし(感慨深い漢詩文を作り合っただけですが)、それにつけても(その事でも)、世の中にのみ(公には在り得ないが世評だけは)めでられたまへば(上々だったので)、後の宮(きさいのみや、太后が)聞こしめして(お聞き付け為されて)、いみじうのたまひけり(厳しく非難なさいました)。

「朝廷の(おほやけの、政府から)勘事(かうじ、排斥)なる人は(された者は)、心に任せて(気ままに)この世のあちはひをだに(日々の暮らしの味わいすら)知ること難うこそあなれ(知るのが赦されない筈ではないか)。おもしろき家居して(風流な住まいに暮らして)、世の中を誹りもどきて(そしりもどきて、非難してからかっている源氏に)、\*かの鹿を馬と言ひけむ人の(昔中国

で鹿を馬と言った人が)ひがめるやうに(事実を捻じ曲げたように)追従する(ついせうする、多くの者が媚びへつらっている)」 \*注に<秦の趙高の故事。謀叛をたくらむ趙高が二世皇帝に馬とって鹿を献上し、帝の前で、それが馬か鹿かを帝臣に答えさせて、自分にへつらう者とそうでない者を見分けて、そうでない者を処罰した。>とある。詰まり、源氏と付き合うものは謀反に組するものだ、という脅しである。さすがに太后は「いと押し立ち、かどかどしき(桐壺巻)」人である。

など、悪しきことども聞こえければ(謀反の嫌疑も掛けられ兼ねなかったので)、わづらはしとて(面倒に思い)、消息聞こえたまふ人なし(源氏に手紙を御送りに為る人も無くなりました)。

二条院の姫君は、ほど経るままに(時が経つほど)、思し慰む折なし(慰みに成る事が在りません)。東の対に(ひむがしのたいに、東の対で)さぶらひし人びとも(御仕えしていた女房たちも)、みな渡り参りし初めは(みな西の対に移って来た当初は)、「などかさしもあらむ(何も然程の姫様でも在りますまい)」と思ひしかど(とと思っていたところ)、見たてまつり馴るるままに(お世話申し上げ馴れるに従って)、なつかしうをかしき御ありさま(優しく美しいお姿に)、まめやかなる御心ばへも(細かな心配りもあって)、思ひやり深うあはれなれば(思慮深さに感服して)、まかで散るもなし(暇乞いを申し出る者も居ませんでした)。

\*なべてならぬ際の人びとには(身分の高い女房たちには)、ほの見えなどしたまふ(夫人は遠目に姿を御見せに為ります)。「そこらのなかに(多くの女の中でこの姫君を)すぐれたる御心ざしも(源氏が格別に大事に為さるのも)ことわりなりけり(良く分かる)」と見たてまつる(と其の女房たちは思い申し上げました)。 \*注に<『集成』は「几帳などに隠れて、容易に姿を見せないのを嗜みとした」と注す。『完訳』は「上臈の女房。源氏の召人、中務・右近なども含まれよう」という。>とある。

## [第五段 須磨の生活]

かの御住まひには(須磨での暮らしは)、久しくなるままに(長くなるほど)、え念じ過ぐすまじうおぼえたまへど(姫君と離れたままではとてもこれ以上我慢して過ごして行けない気がしなされたが)、「我が身だにあさましき宿世とおぼゆる住まひに(自分でさえ情けない運命だと思っている此処の暮らしに)、いかでかは(どうしてみても)、うち具しては(姫を伴ってでは)、つきなからむ(上手く行きそうも無い)」さまを思ひ返したまふ(事情を思い直しなさいます)。

所につけて(田舎暮らしなので)、よろづのことさま変はり(万事勝手が違って)、見たまへ知らぬ(ご存じなかった)下人の上(しもびとのうへ、下働きの暮らしぶり)をも(までも)見たまひ(間近に御覧になって)、慣らはぬ御心地に(自分にはとても馴染めない気がして)めざましう(驚き)、かたじけなう、みづから思さる(源氏のご自分の身分を恵まれていると御思いに為りました)。煙のいと近く時々立ち来るを(例えば煙がごく近くに時々立ち寄せて来るのを)、「これや海人の塩焼くならむ(これが塩焼きの煙なのだろう)」と思しわたるは(とあって居らしたのは)、おはします後の山に(お住まいの裏山で)、\*柴といふものふすぶるなりけり(下人が柴というものを燻していたものなのでした)。めづらかにて(源氏は珍しがって一句詠みました)、 \*注に<『完訳』は「柴たく山里の晩秋である」と注す。季節の推移を語る表現。>とある。「阿蘇の野焼き」の良いWebサイトがあったが「野焼き」は「春」。秋なら落ち葉焚きか。灰は肥料になると言うし。



「山賤の庵に焚けるしばしばも、言問ひ来なむ恋ふる里人」(和歌 12-39)

「しばしば柴で炊けるなら、別れも暫し山暮らし」(意識 12-39)

冬になりて雪降り荒れたるころ、空のけしきもことにすごく(空模様もひどく沈んで)眺めたまひて(其の暗雲に源氏は何を御思いに為ってか)、琴を弾きすさびたまひて(一曲琴を弾き流しなさって)、良清に歌うたはせ、大輔、横笛吹きて、遊びたまふ(演奏なさいます)。心とどめて(源氏が熱心に)あはれなる手など弾きたまへるに(聞かせ所を演奏なさんと)、他物の声どもは(ことものこゑどもは、後の二人は演奏を)やめて、涙をのごひあへり(涙を拭い合っていました)。

\*昔、胡の国に遣しけむ女を(むかしこのくににつかはしけむをんなを、前漢の王が北方の国王に後宮の女を贈ったという故事を)思しやりて(源氏は冬の到来に思い合わしなさって)、「ましていかなりけむ(どんなに無念だったことだろうか)。この世に(実際に)我が思ひきこゆる人などを(自分の愛する女などを)さやうに放ちやりたらむこと(寒い国に手放してしまったとは)」など思ふも(などと考えるにつけても)、あらむことのやうにゆゆしうて(自分にも起こり兼ねないような寒々しさを覚えなさって)、 \*注には簡単に<王昭君の故事。『西京雜記』『和漢朗詠集』に見える。>と短くある、が訳が分からない。Wikipediaで「王昭君(おうしょうくん)」を調べると、<前漢の元帝が匈奴の王の妻として後宮から王昭君を選んで贈ったが、相手の王とは一男を儲けたものの死別し、次の王の義理の息子と再婚し二女を儲けた>、とある。遊牧民の慣習ならありふれた再婚でも、漢族には実母との近親婚に近い不道德と見做され有名な悲劇となった、とある。日本でも、今日でも、死別婚なら亡夫の兄弟が相手の場合も然程めずらしくもない。しかし源氏の場合は父帝を裏切った不貞であり、其の過ちを隠したまま其の不貞の子の帝位を狙っているのである。本物の悲劇である。それを今、為時女は殆んど悪びれもせず権力抗争劇として描いている最中である。いくら「あらむことのやうにゆゆしうて」と畏まって見せても、とっくにネタは上がっている。いやはやなんとももの舌巻物だが、この明け透けさこそが之の物語の生命線かと私は思う。ところで『西京雜記』での王昭君の故事としては、昭君が似顔絵師に賄賂を贈らなかったので醜女に描かれて北国に送られる憂き目に遭った、とあり、『和漢朗詠集』でも大江朝綱(おおえのあさつな)の詩の結びに其の故事が詠まれている、との事。尚、朝綱の漢詩については『謡躰めぐり』というWebサイトの「昭君」のページを参照させていただきました。平安期に謡曲は無かったようですが、曲想の芽は既に在ったということでしょうか。

「\*霜の後の夢(しものちのゆめ)」と誦じたまふ(と贈られた宮女の王昭君を詠った大江朝綱の漢詩を口ずさみなさいました)。 \*注に<「胡角一声霜後夢 漢宮万里月前腸」(和漢朗詠集、王昭君、大江朝綱)の詩句。>とある。詩の全文は前出のサイトに在りましたが、此处では<寒さの中での郷愁>に源氏は同調したのしょうから、注釈にある抜粋部分だけを味わっておきます。「胡角一声(こかくいっせい、胡国の角笛が鳴り渡る)霜後夢(そうごのゆめ、一面に霜が降りた荒涼とした野原の夕暮れに夢見る)漢宮万里(かんきゅうばんり、漢の都は遙か遠く)月前腸(げつぜんのはらわた、月光の中に絶望する)」という事らしい。

月いと明うさし入りて、はかなき旅の(簡素な一時凌ぎの)御座所(おましどころ、宿所は)、奥まで隈なし(くまなし、見通せます)。床の上に(ゆかのうへに、寝床で横になったまま)夜深き空も見ゆ。\*入り方の月影、すごく見ゆるに(寒々と見えて)、 \*「夜深き空」に「入り方」になる月齢は分かり難いが、続く描写から察せば「夜更け」よりは「夜明け前」の時間帯かと思う。ざっと陰曆十月の深夜 3:00~4:00 の月の入りを想定すれば、十三夜。九月十三日の名月に一月遅れですっかり冬模様。

「\*ただ是れ西に行くなり」と、ひとりごちたまで(眩きなさって)、 \*注に<源氏の独語。「天廻玄鑑雲将霽 唯是西行不左遷」(菅家後集、代月答)を踏まえる。>とある。「菅家後草」については「GLN からこんにちは」サイトの「菅原道真公」のページが珍しいほど丹念で詳しい。其のページに「問秋月」の漢詩全文が紹介されていて、<月は無実なのに何故に雲に隠れて西へ流されるのか>と管公が自らを月に準えて自問している、と解説されている。そして同ページに、続いて「代月答」全文が紹介されて、<月は世界を照らして東から西へ廻っているの、雲に隠されて西へ送られて見えたのは偶々の見掛けに過ぎない>と月に代わって自答している、と解説されている。そこで源氏は管公のように達観したかった、という此処の描写なのだろう。諸葛孔明の赤壁の風は劇的だが、人間社会に於ける気象の勘所を押さえた人は後世に長く名を残す、ようだ。学者で軍人で政治家、というのは今日でも世界を率いる人の主要な資質かもしれない。

「いづ方の雲路に我も迷ひなむ、月の見るらむことも恥づかし」(和歌 12-40)

「妙に明るく照らされて、身の程知らずを思い知る」(意識 12-40)

とひとりごちたまひて(と独詠為さると)、例のまどろまれぬ暁の空に(今だ明けやらぬ早朝前の空に)、千鳥いとあはれに鳴く(千鳥が寒空に如何にもの風情で鳴きます)。

「友千鳥諸声に鳴く暁は、ひとり寢覚の床も頼もし」(和歌 12-41)

「寒空に鳴く鳥の群れ、何処を目指すか諸共に」(意識 12-41)

また起きたる人もなければ、返す返すひとりごちて臥したまへり。 \*冬の到来に不敵な笑みを浮かべる源氏、といった描写のようだが、何か勝算の糸口を得たような記述があったらどうか。晩秋に大式一行が上京の際に立ち寄りかけたが、人目を憚って通り過ぎた。しかし京では源氏待望の機運は在りそうだ。大后は其の芽を摘むのに躍起だが、人心は源氏の方に向いている。二条院の妻は悲しんでいるが、留守宅の管理運営は上首尾のようだ。なるほど、具体的な動きは記されていないが、環境は悪くない。

夜深く(夜明け前に)御手水参り(みてうづまみり、洗顔を済ましなさって)、御念誦(おんねんず、読経)などしたまふも(など源氏がなさるのを)、めづらしきことのやうに(立派な行いとして)、めでたうのみおぼえたまへば(従者たちは感心ばかりしていたので)、え見たてまつり捨てず(決して御側を離れようと思わず)、家にあからさまにもえ出でざりけり(京の自宅に一時でさえ帰る事は在りませんでした)。

[第六段 明石入道の娘]

明石の浦は、ただ(直ぐ)\*這ひ渡る(はひわたる、車もいらず歩いて行ける)ほどなれば(近さなので)、良清の朝臣、かの\*入道の娘を思ひ出でて、文など遣りけれど、 \*注に<「はひ渡る」は歩いて行けるほどの距離というニュアンス。当時の貴族女性は膝行していたのでこのような表現が生まれた。>とある。 \*「明石入道」は若紫巻で、源氏が流行り熱の祈禱を受けようと出掛けた北山での、供人たちの風景を愛でる雑談中に良清が話題にした前の受領である。播磨守の子弟たる良清が其の娘に言い寄ろうとしても、高望みの明石入道は娘の後宮入りを果たすべく、頑として受け付けなかった、と述べられていた。

返り事もせず(娘からの返事も無く)、父入道ぞ(父親の入道から)、「聞こゆべきことなむ(御話ししたい事があるので)。あからさまに対面もがな(少しでも直接御目に掛かりたいのだが)」と言ひけれど(と言って来たが)、

「うけひかざらむものゆゑ(承知して呉れそうも無いのに)、行きかかりて(出かけて行って)、むなしく帰らむ(断られて帰るといふ)後手も(うしろでも、後姿は)をこなるべし(馬鹿げている)」と、屈じ甚うて(くじいたうて、すっかり滅入って)行かず(良清は出かけません)。

世に知らず(明石入道は世に珍しいくらい)心高く思へるに(上流意識が強く)、国の内は(播磨国内であれば)守のゆかりのみこそは(国主の子息である良清こそが最も)かしこきことにすめれど(畏れ多い身分の方と心得るものなのに)、ひがめる心はさらにさも思はで(ひねくれ者の入道は決して其の様には認めず)年月を経けるに(良清を退けたまま数年を経たが)、この君かくておはすと聞きて(源氏が須磨に御出でと聞いて)、母君に語らふやう(妻に語りかけて)、

「桐壺の更衣の御腹の、源氏の光る君こそ、朝廷の御畏まり(おほやけのおんかしこまり、政府の御咎め)にて、須磨の浦に物し給ふなれ(ものしたまふなれ、いらっしゃるといふ事だ)。吾子の\*御宿世にて(あこのおんすくせにて、我が娘の宿縁に於いて)、おぼえぬことのあるなり(思いがけない運気だ)。いかでかかるついでに(何とかこの機会に)、この君にをたてまつらむ(源氏に娘を差し上げなくては)」と言ふ。 \*注に<『完訳』は「源氏の流離を、わが娘の宿縁ゆえとする点に注意。源氏との結婚を確信して、娘を「御」と敬う」と注す。>とある。

母(母君は)、「あな、かたはや(まあ、あきれた)。京の人の語るを聞けば(京の人の話では)、やむごとなき(身分の高い家柄の)御妻ども(みめども、奥方たちを)、いと多く持ちたまひて、そのあまり(その上に)、忍び忍び(人目を忍んで)帝の御妻さへあやまちたまひて(帝の妃にまで手を御出しに為って)、かくも騒がれたまふなる人は(今回の騒動に御遭いに為ったような人なのですから)、まさにかくあやしき(我が娘のように身分の低い)山賤を(山育ちを)、心とどめたまひてむや(気に入るものですか)」と言ふ。

腹立ちて(入道は腹を立てて)、「え知りたまはじ(御分らないようだな)。思ふ心ことなり(目標が違うのです)。さる心をしたまへ(考え方を御換えなさい)。ついでして(何とか都合をつけて)、ここにもおはしまさせむ(此処まで光る君に御越し頂こう)」と、心をやりて言ふも(思惑有り気な言い方も)かたくなしく見ゆ(頑固そうです)。まばゆきまでしつらひかしづきけり(そして入道は邸を眩しいほど豪華に飾り立てて姫を御大層に傳く侍女を揃えました)。

母君、「などか(何故此処まで為さいますのか)、めでたくとも(いくら王家の家柄といえども)、ものの初めに(娘の初めての結婚相手に)、罪に当たりて流されておはしたらむ人をしも(罪を問われて流されて居らしたような人を何故にわざわざ)思ひかけむ(御考えに為るのですか)。さても(それも)心をとどめたまふべくはこそあらめ(気に入って頂けてこそその事でしょう)、たはぶれにてもあるまじきことなり(戯れは御止め下さい)」と言ふを、いといたくつぶやく(入道は頻りに妻の不理解をこぼしました)。

「罪に当たることは(罪を問われる事は)、唐土(もろこし)にも我が朝廷(みかど)にも、かく世にすぐれ(このように世に傑出し)、何ごとも人にことになりぬる人の(何事も人に差を付ける人には)、かならずあることなり。いかに(源氏の君がどういう)ものしたまふ(生い立ちの)君ぞ(方か分かっているのか)。\*故母御息所は、おのが叔父にもものしたまひし按察使大納言の御娘なり。\*注にく桐壺更衣が叔父按察大納言の娘で、源氏はその子。すなわち、源氏は自分のいとこの子である、という。>とある。明記すべき明示である。

いと\*警策なる(かうざくなる、際立った)名をとりて(評判を得て)、宮仕へに出だしたまへりしに(後宮入りなされると)、国王すぐれて時めかしたまふこと(帝が優れてご寵愛なされる事の)、並びなかりけるほどに(並ぶ者が無いほどで)、人の嫉み重くて(他の妃の妬みを買って)亡せたまひにしかど(母御息所はお亡くなりになったが)、この君のとまりたまへる(源氏が遺児として残っていらっしゃるのは)、いとめでたしかし(何と素晴らしい事だろうか)。 \*「警策」は(きょうさく)との読みもあるようで<馬にあてる策(ムチ)の意から、人を驚かすほど優れていること>(古語辞典)、との事。

女は心高くつかふべきものなり(女は気位を高く持って上流の男に仕えるべきものだ)。おのれ、かかる田舎人なりとて(私がこのような田舎者だからと言って)、思し捨てじ(源氏は娘をお見捨てなされるまい)」など言ひゐたり(などと言っていました)。

この娘、すぐれたる容貌ならねど(然程の美人ではなかったが)、なつかしうあてはかに(優しく上品で)、心ばせあるさまなどぞ(教養の高さは)、げに(確かに)、やむごとなき人に劣るまじかりける(公卿の娘にも劣らないようでした)。身のありさまを(自分の身分を)、口惜しきものに思ひ知りて(取るに足らぬ者と弁えていて)、

「高き人は(中央の偉いさんは)、我を何の数にも思さじ(私を物の数にも思わないだろうし)。ほどにつけたる世をば(そこそこの男と過ごす人生も)さらに見じ(余計つまらない)。命長くて(長生きして)、思ふ人びとに後れなば(両親に先立たれたら)、尼にもなりなむ、海の底にも入りなむ」などぞ思ひける(などと入道の訓え通り気位高く考えていました)。

父君、所狭く思ひ(律儀に古式に則り)かしづきて(娘を育て上げて)、年に二度(ふたたび)、住吉に詣でさせけり。神の御しるしをぞ(其の御利益といった物を)、人知れず頼み思ひける(心ひそかに願っていたわけです)。